

あるむぜお73

府中市郷土の森博物館だより

a | museo NO. 73

2005 年 9 月 20 日



新町の宮本邸付近 昭和 36 年（1961）撮影（写真No. 229-08a）

目次

- 1-2 宮本常一の見た府中 その2
緑を求めて府中市に・・・
- 3 展示会案内 テーマ展
武蔵 野々宮の里
ー府中六所宮の祭礼と交流
- 4-5 ノート 秤の無い村
6 シリーズ体験学習の砦 ふるさと体験館の野望
- 7 最近の発掘調査 番外編
武蔵府中熊野神社古墳 国指定史跡決定！
- 8 たまRIVER WARS @影法師の正体

話をきめて娘をつれてその家を見せにいったら娘が「こんなに遠いところなの」と涙をおとした。国分寺の駅から私の家まで近道を通ると途中にほとんど家はなかった。道は細く悪く、その道があるいて駅まで出て市ヶ谷の学校まで通うとなると、心細くもなるであらうと不慥に思った。

しかし夜になると星が実に大きく頭の上にきらめき、どこかでカッコウがなき、昼は家の横から富士も見えた。家のまわりにも木が多かった。その林の中の道があるいてみるのは楽しかった。

宮本常一『私の日本地図 武蔵野・青梅』
(1971 年 同友館より)

宮本常一の略歴を見ると必ず登場するのは彼を庇護し続けた渋沢敬三という人物の名前です。宮本は渋沢の家に住んでいる時期が長くありました。前回も書いたとおり、宮本は渋沢の主宰していたアチックミュージアム（屋根裏の博物館・現在は神奈川大学日本常民文化研究所などに引き継がれている）の所員として全国各地を旅し、生活の拠点もまた渋沢邸にありました。そんな宮本がそれまで住んでいた三田の渋沢邸を離れ府中に住むようになったのは1961年（昭和36）のことでした。

その経緯については、前頁に紹介した『私の日本地図 武蔵野・青梅』（1971年 同友館）のような文章とともに、自身が70歳のときの回顧録である『民俗学の旅』（1978年 文藝春秋）にも当時の様子が次のように記されています（ふりがなは佐藤）。

昭和三十六年には娘が郷里の高校を卒業して東京へ出てきた。娘もまた邸におけるといわれる。しかしほんの少しではあるが、家を買うための金も貯えた。不足の部分はどこからか借りて家を買いたいと思ってそういう用意もしているとお話しすると、それでは家を買ってもよいだろうと、現在住んでいる家を買うことになった。新しく建てるのはめんどくさいので、誰か住んでいる家で転勤か何かで売りに出るものがあればということを経営にさがした。中央線国分寺の駅を南へ出て、大きなケヤキの並木のある道のあるいて、そのケヤキと家のとぎれた麦畑の向うに、小さい緑色の瓦を葺いた家があった。空にはヒバリがなかった。ただそれだけのことですっかりうれしくなってその家を買うことにした。そのような風情はいつまでもそのまま続くものであろうことを何となく考えたのだが、ほんのわずかの間に周囲が家で埋まってしまった。

総数約10万枚におよぶ彼の写真のなかから約5000枚を選び、さらに残っていた彼の日記を翻刻した『宮本常一 写真・日記集成』（2005年 毎日新聞社）をみると、この年5月12日（金）に国分寺の大和不動産に仲介を受け、中古の家を購入することにしたようです。府中とは偶然の出会いでした。しかしこれこそ府中市新町の宮本邸です。この家はそれまで旅づくしの人生の中ではじめて持った自宅でした。同日の日記の最後にはそのときの感想を「人生50年かせいで、この家一つ。何ともわびしい気がする」と述懐しているのが印象的です。そして一ヶ月ほど経過した6月22日（金）に引っ越してきたのです。

1904年生まれの宮本はこのとき53歳、8月には渋沢敬三が宮本のことを賞賛した評論「わが食客は日本

一」が雑誌『文藝春秋』（宮本の日記によるとそのとき掲載された彼の顔写真などは、府中に引越した4日後の26日三田で撮影された）に掲載され、12月には東洋大学より文学博士の学位を受けるという年です。前年には傑作として名高い『忘れられた日本人』や『日本の離島』Ⅱ（いずれも未来社）を出版し話題となり宮本常一という人物が広く世間に知られるようになっていた頃のことでした。

引っ越した家について、宮本は「府中市北端の畑の中にある大貫さんという人の家。14坪ほど。小さい家だがキッチンとしたつくり」と最初の感想を述べています。府中市とはいえ、小金井と国分寺の境界線に近い場所で最寄駅は国分寺だったようです。

表紙の写真は彼が住み始めた頃の宮本邸周辺の様子です。畑のなかにぼつぼつと家が建ちはじめたころの様子がわかります。また、下の写真も自宅付近から国分寺方向を撮影した風景だと思われます（いずれも『宮本常一 写真・日記集成』にも掲載）。宮本が『民俗学の旅』で述べたように現在、このあたりは畑を見つけることが難しくなるくらいに家が建っています。

たくさんの写真を撮影し、画像自体を記憶のメモにしていた宮本には、土地の変化をみつめる視線があったと思われます。開発がはじまり農地が住宅地へと変貌を遂げていきはじめる頃の武蔵野の地を彼は終の棲家としました。そして故郷の周防大島とともに拠点とし、1964年（昭和39）には小平にある武蔵野美術大学に勤務するようになります。そして学生を育成する傍ら各地へ旅を続け、また写真も何枚も撮影しました。府中に住むようになって以降、それまでまったくなかった府中界隈の写真は枚数が非常に多くなりました。その結果宮本の府中を見る視点とともにその風景の変貌過程をもみることができるようになったのです。



自宅近辺から国分寺方面を撮影か？ 写真No. 229-09 b

武蔵 野々宮の里

一府中六所宮の祭礼と交流

会期:10月1日(土)～11月23日(祝)

府中の大国魂神社（六所宮）の祭としては、5月の「くらやみ祭」が有名ですが、7月の「青袖祭・杉舞祭」も由緒ある重要な神事です。12日・13日の両日、境内の宮之咩神社と拝殿において舞が奉納されます。源頼朝が武蔵国内の神職に命じて天下泰平を祈願したのが起源とされ、江戸時代の半ばまでは、武蔵各地から神主らが実際に参加していました。

なかでも、大宮住吉神社（埼玉県坂戸市）を筆頭とする北武蔵8社の神主が、中世に溯ってこの神事に参集していたことを示す唯一の史料が、野々宮神社（埼玉県日高市）に残されています。天文16年（1547）のこの文書には、「一番勝呂（大宮住吉神社）」に次いで「二番野々宮」と記されているのです。野々宮神社は、京都嵯峨野の野宮の分社と見られる古い神社で、無形民俗文化財指定の獅子舞も伝承されています。

府中六所宮と野々宮の関係はこれだけに留まりません。野々宮神社には、江戸時代後期の六所宮神主の猿渡家と野々宮神主との交流を示す資料が多数伝えられていることが、このほど明らかになりました。猿渡盛章の家集『樅の下草』に野々宮家を訪ねた折の「うれしくも結ぶかりねの枕かな 千艸花さく野宮の秋」という歌が掲載されていますが、この一首を盛章が記した短冊も野々宮神主家には大切に保管されています。

展示では野々宮神社宮司家に保管されていた新出資料などで府中と野々宮の交流を紹介します。

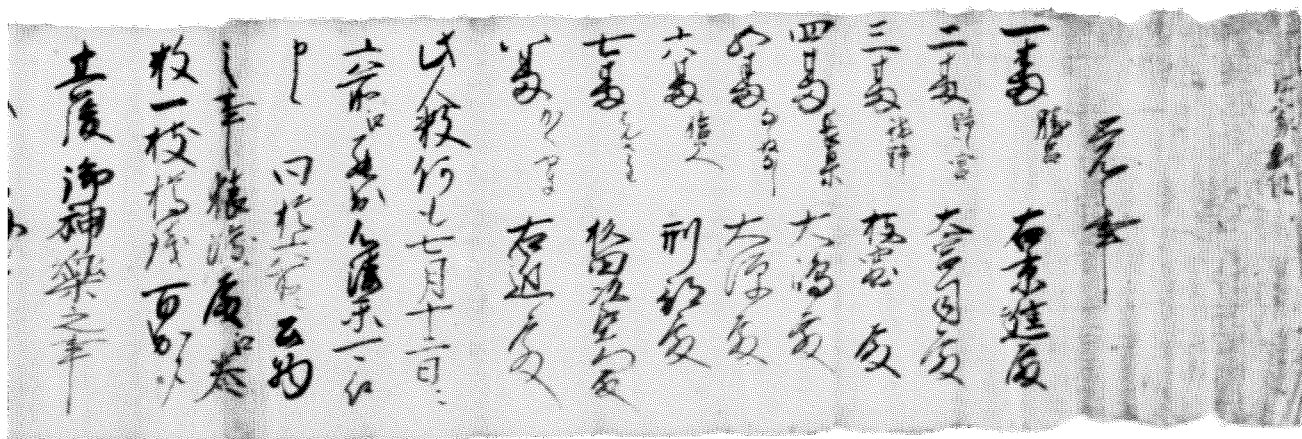
（小野一之）



杉舞祭



野々宮神社社殿



天文16年六所宮祭事参集覚（野々宮神社文書）

秤の無い村



府中にあった「守随」の印が鋳出されている錘（高さ 12.6cm 底径 10.4cm）

単位と秤

先頃数の数え方が気に食わない、と外国の言葉にケチをつけていた某知事がいました。しかし少し歴史をさかのぼってみれば日本の物の数え方、計り方だって相当なものだと思います。面積を表すときに用いていた町・反・畝・歩（坪）という単位は、畝→反→町は10ごとに単位が変わりますが、1畝は30歩で、何と10進法と30進法とを混ぜて使うというウルトラぶり。

また、江戸時代のお金は金、銀、銭と3種類の貨幣が流通しており、金貨の単位は4朱で1分、4分で1両と4進法で、銭の単位は文といい10進法ですが、1000文になると1貫といいました。これらに対して、銀貨は、決まった数値で貨幣が作られておらず、重さで量られました。使われる単位は匁で、やはり1000匁を1貫といいました。

こうしてみると、計数貨幣である銭貨も秤量貨幣である銀貨も同じ「モン」「カン」という語の単位を使っていることが分ります。

「匁」や「貫」は日本固有の単位ですが、元をたどると銭貨「1文の目方」で「文目」、「匁」の字は「銭」と同義語の「泉」のくずし字だそうです。また「貫」は銭の穴を「貫いて」紐を通し、1000枚束にした分の目方を言いました。つまり、銭貨も重さで量られていたのです。

鎌倉時代以降に大量の銭貨と共に、それを重さの単位とする制度が中国から入って来て、民間に広まる過程で上のような言葉で通用されていったのです。

ところで、重さを量るにはそのための道具、秤が必要で、秤には天秤と棹秤の2種類ありましたが、正確な重さの分銅が必要な天秤は江戸時代には両替商でしか使われず、民間の多くの商取引は、てこの原理で錘と量る物を釣合わせる棹秤で行われました。しかし、この秤はちょっとした手の加減、目盛りの位置で不正を働く事も可能です。秤の基準が一定でなければ公正な取引はできません。

秤改め

そこで、徳川幕府は江戸時代を通じて「秤は公儀の道具」と位置づけ、基準の統一のみならず棹秤の製造・修理・管理等の事業を行う秤座を、西日本33カ国は神家（京都）に、東日本33カ国は守随家（江戸）に独占的に開かせました。

江戸秤座守随氏の祖は吉川守随茂清という武士でしたが、甲州武田氏の下で、秤の事を預っていたところから、徳川氏の下でも、秤についての独占権を与えられ、守随を姓としました。

とは言っても、2軒だけでは全国の秤の需要はまかないきれませんので、分家や秤座に奉公していた者に「出店」「出張所」として地方秤座を開かせ、名代役とさせていました。府中に近い所では、八王子秤座が文政3年（1820）に開かれました。

そういうわけで、東日本で江戸時代に正規の秤として通用していた品には「守随」の極印が押され、また「秤改め」と称して、何年かごとに本座あるいは地方秤座

から人が出張り、周辺村々の秤の検査が行われました。

秤改めは、幕府の権威をバックになされるのですから、苗字を許され、移動には公用と同様の便宜が計られるなど、村人から見れば幕府役人に対するのと同様の態度をとらざるを得ませんでした。

精度の狂いが見つければ、修理代を払って直してもらわねばなりませんし、そもそも検査を受けるためにも1台ずつ検査料を支払う決まりでした。

年代は書かれていませんが、下染屋村(府中市白糸台)の文書に、秤改めの際の負担を村々でどう配分するかを取極めた書付が残っています。これによれば、改めの出役3人が府中宿に3日間逗留しています。

「四ツ谷村 秤改二付小前連印帳」

郷土の森博物館が収蔵する古文書のほとんどはそれらを百年、二百年と守ってくださった市民からの寄贈・寄託によっています。しかし稀に市内から流出したものが、古書店などで発見される事があります。昨年度、そのような古文書が数点手に入りました。

その中に、文政9年(1826)の四ツ谷村の「秤改め」に関する1冊がありました。これまで知られている市内の古文書で秤改めについて触れているのは珍しいので、紹介してみましよう(読点筆者)。

- 一 此度、秤御改御出役御座候二付、秤所持之者、有無相糺之由、御座候處、私共義者、農業専一、少々宛商ひ躰之者有之候而も、小売酒、或者、草履・草鞋・草子等類ニ御座候得者、秤二而売買与申義無之候、其外秤取扱候もの無之候、依之小前連印仕候以上

文政九戌年十二月

四ツ谷村

八右衛門◎

(以下人名40人省略)

<現代語訳>

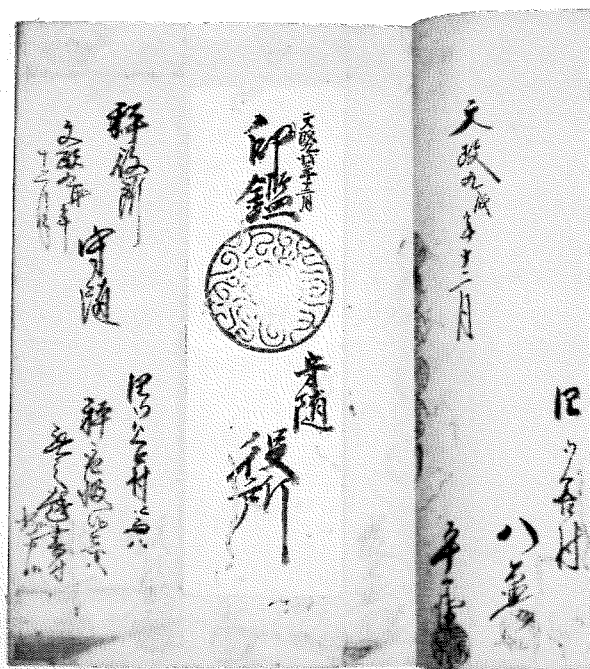
このたび、秤お改めの役人の出張があり、秤を持っている者の有無を糺そうでございますが、私ども(の村)は、農業第一で、少しばかり商ひらしい事をする者があっても、酒の小売やあるいは草履やわらじ、草子等の類(を商う事)でございますので、秤を使つての売買ということはありません。

その他、秤を取り扱っている者はありません。このことを小前百姓が全員で判を捺し(て申し上げ)ます。以上

文政9(1826)戌年12月

四ツ谷村

(百姓連印)



「四ツ谷村 秤改二付小前連印帳」中の「守随」印鑑と包み紙

「秤改め」に際して、四ツ谷村が、村内の商いには秤を使うようなものは無く、従って改め(検査)に持ち出すような秤は一つも無い、と村民全員が、ハンコを捺している内容です。冊子にはこの文章の他に、守随役所の印鑑が捺された紙と、四ツ谷村からは秤を取り扱う者がいない旨の書付が出ている、とメモされたその包み紙が綴じこまれています。

この届出は文字通り受け取っていいものかどうか迷います。江戸時代後期にもなった村の経済活動が、秤を必要としないとは信じ難いことですし、四ツ谷村からの品ではありませんが、当博物館の収蔵庫には、市内に残されていた江戸時代の「守随」の極印が見える棹秤や錘が収蔵されています。

一方で、にせ秤を作ったものは引き回しの上獄門とか、隠し秤が見つかるはずいぶん罰金を取られた上に所払いになるなどの例を見ると、四ツ谷村が極印料おしさに村ぐるみで秤を隠したと言い切るのも難しいところでは。いずれにしろ、村に一挺も秤が無いという言い分が通る社会的背景はあったということでしょう。

このような政府による秤の統制という考えは、明治新政府になってからも、秤座こそ解体されるものの受け継がれ、現行の計量法にもいくばくかの影響を与えています。

使用史料：下染屋村糴谷家文書Ⅱシ-171

府中市域散逸文書 2004-05-06

参考書：小泉袈裟勝『秤』1982年 法政大学出版局

小泉袈裟勝『単位の歴史辞典』1989年 柏書房

林 英夫『秤座』新装版 1995年 吉川弘文館

「ふるさと体験館の野望」

佐藤智敬

「ふるさと体験館（通称体験館）」。展示会、水遊び、梅まつりなどで郷土の森博物館にいらした際、竹馬や輪投げで遊んだ記憶はありませんか？昔ながらの鍛冶屋仕事を見たり、風車づくり、折り紙づくりなどをしたことを覚えていませんか？そこは日曜、祝日を中心に昔遊び、手作りのもの作り、職人の技の実演などをあこなっている場所。知る人ぞ知る施設なのです。

体験館の行事を一年通して見てみると、わが事ながら企画する者の悲喜こもごもを痛感します。ここを切り盛りしているのは担当職員と数名の臨時職員、ボランティア体験学習班のみなさん、そして各教室を担当くださっている先生方です。この場所でどのようなことをすればいいかを考え、皆で話し合い内容を組み立てていきます。予定作成にあたっては干支、しめかざり、梅、あじさいなど、その季節にあわせたものと、わらざうりや竹とんぼなど常に人気のある教室をバランスよく織り交ぜていくことが求められます。その組み立ての場所こそ産みの苦しみの場です。そしてそれらを限られた予算のなかから準備し、本番となります。

こうした過程では「この企画では誰もお金を払ってまで作りたくない」「実演が少ない」「この時期このスタッフの人数では対応しきれない」などの忌憚なき意見が交わされます。「府中でつくられ、遊ばれていた昔ながらのモノを中心にすべき」「安く、早く、準備に時間のかからないものを中心に！」とか「いちどきに少人数しか対応できないのだから質も値段もそれなりに」とか「準備をする時間がとれないのにそのような計画をするな！」「連続講座はできないのか？」「新しい実演の先生はいないか」「いつ来ても気軽に体験できるものを」その逆に「確実に体験できるように事前予約制に」等々、検討に苦悩する貴重なご意見にも囲まれています。こうした意見の根底には「ふるさと体験館でたくさんの人たちに楽しんでもらうためにはどのようにすればいいか？」という願望がスタッフそれぞれにあるのだから当然のことです。

その話し合いの成果が反映できないことも当然あります。一番の理由に一度に体験できる人数が限られていることがあげられます。10～30人であれば対応できますがそれ以上になると空くまで待ってもらうかお断りしなければならなくなります。たくさんの人に来てもらいたいけれども参加希望者が多すぎてもいちどきには対応できない、といういささかやっかいなジレンマをはらんでいるのです。

予想することが難しい事態も多々あります。何週間

も前から準備をしてきたのに、予想の半分の人数にも満たない場合。それどころか、どしゃぶりの日などほぼ誰もいないことすらあります。来てくださってもご期待に沿えないことがあります。刃物を持つ、火を使用するなどの面で年齢制限をすることもあるし、当日せっかくいらしてくれたのに事前申込みがいっぱいで対応できないとか、直前でキャンセルとなりせっかく準備した材料が無駄になってしまった・・・などなど。

そんな中でも「この前やって面白かったからまたきました」といった嬉しい言葉をかけてもらえることもあります。それはもう至福の時です。

最近体験館のかかえるもう一つの課題は、「おかしはこんなものをつくっていたんだ・・・」と感慨にふけてもらう企画を行うことが困難になってきたこと。竹とんぼやわらざうりを作ったり使用したりした思い出を持っていない人のほうが圧倒的多数になっていきますから、府中で行われていた昔を追体験することがとても難しく、伝承する先生も少なくなりました。しかし、この博物館自体がかつての府中を再現した場所なので、ここもまた「ふるさと」なのです。体験館はかつてのふるさと「を」体験する場所であるとともに郷土の森博物館というふるさと「で」体験する場です。そんな趣旨にあった企画を考えなくてはなりません。さまざまな意味でのふるさと体験ができる場所として、大いに可能性を秘めた場所なのです。

この場所はさまざまな人に博物館ならではの体験をしてもらうための施設として今後も色々な企画を立てていきます。その体験を通しておかしの遊び、つくるものにまつわる知識、四季の草花、博物館のことなどを知っていただく機会になればなお嬉しいです。「またやりたい」「また見たい」と思えるもの、郷土の森博物館のふるさと体験館という立地で行うのにふさわしいものを生み出していくことこそ目標です。みなさんがよるこんでなおかつふるさとを知る機会にしてくださいれば担当者としてもありがたいですから。

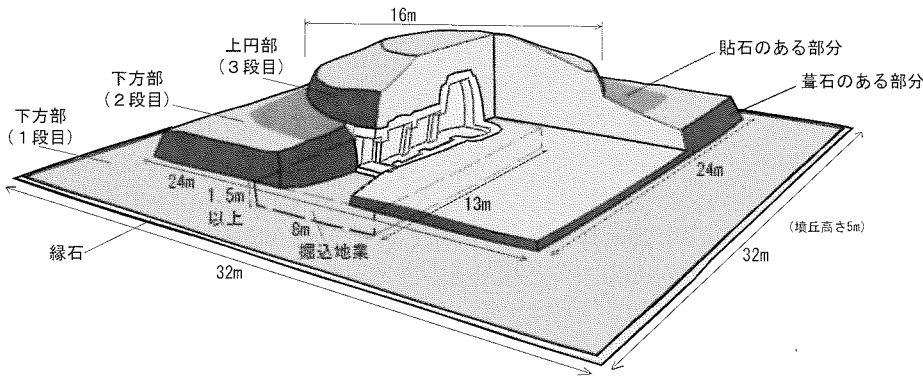


今年8月「夏休み工作教室」より、竹で編んだ風車づくりの様子。たくさんの方が来てくれました(写真左は波多野講師)。

武蔵府中熊野神社古墳

国指定史跡決定！

西府町二丁目 府中市遺跡調査会 紺野 英二



武蔵府中熊野神社古墳 模式図

武蔵府中熊野神社古墳は、国内最大・最古の上円下方墳として、一昨年より市民をはじめ、全国の考古学ファン・研究者の注目を集めてきました。そして、国の史跡指定を目指し、速やかに発掘調査報告書も刊行し、去る7月14日、国の史跡に指定されました。現在のところ、国の史跡は国内約1,500か所ありますが、都内の古墳では大田区田園調布にある亀甲山古墳に次いで2例目となります。

武蔵府中熊野神社古墳は、西府町の熊野神社の境内にあります。この古墳は、7世紀中頃から後半につくられたもので、四角形の上に円形を乗せた形をした“上円下方墳”です。古墳の主体部（遺体を埋葬する空間）は、かつて本誌36号で紹介したように、切石を積んで構築した複室の横穴式石室で、多摩川中流域に見られる特徴的な形をしています。また、遺物では、鉄地に銀象嵌を施した鞘尻金具が出土しています。この象嵌文様は国内外に例のないもので、この古墳の被葬者の地位の高さを示すものといえます。

以上のことから、7世紀の中頃に、府中を本拠とした地域の有力者が、急速に畿内の中央政権との結びつきを強めたことが推測できます。想像をたくましくすれば、のちの奈良時代に府中に国府を誘致した有力者の先祖にあたる人が、この古墳の被葬者だと考えたいところです。

このように、武蔵府中熊野神社古墳は、府中の貴重な文化遺産といえます。今後は、市民の皆さんが中心となり、この古墳を保存し、活用していくことが必要です。全国各地では、市民の力で、史跡を守り、育て、地域の観光に役立てている事例が増えてきました。現在、府中市では、古墳の保存・活用検討委員会を立ち上げ、さまざまな意見交換を行っています。今後は委員会とは別に、市民の皆さんを中心としたワークショップで、古墳の保存・整備・活用について検討していただくことも予定しています。こうした活動を通して、この古墳が将来に亘って受け継がれていくことが大切です。

なお、府中市では、『ふるさと府中 文化財めぐり』という地図を発行しました。前回紹介の“武蔵国分寺跡参道口”や今回の“武蔵府中熊野神社古墳”の見学コースも掲載しています。また、美好町から西府町にかけては、小さな古墳もいくつか現存しています。お天気のよい休日に、この地図を片手に太古の昔に想いをはせながら、文化財めぐりをしてみてはいかがでしょうか。『ふるさと府中 文化財めぐり』は本館や市役所市民相談室、市政情報センター、観光情報センターなどにて100円で販売しています。



熊野神社古墳出土の鞘尻金具

たも RIVER WARS

⑩影法師の正体

中村武史

摩訶不思議な多摩川の冒険生活は3日目を迎え、さすがに全員のスタミナも底を突いていた……工ノキンの表情からは何かに当惑した

かのような精神的疲労が見受けられ、ハニーは頭をつル回転させた故の、おそらく思考疲れだろう、タウ工は単純に肉体がグロッキー状態、セイコに至ってはついにダウンによるリタイヤとのことである。思えばたった一昨日に端を発した出来事がすでに1ヶ月以上のこのように感じられるのは、いかに濃密で過酷な時を過ごして来たかを裏付けている。郷土の森博物館を後にして、大丸の堰から再びイカダをスタートさせた3人だったが、誰一人として会話を切り出す者はいなかった。明らかに頭が錯乱し、必死にそれを整理しようとするあまり、お互いに言葉を交わす余裕などなかったのである。

是政橋をくぐり抜けて、気が付けば随分と川の幅が広がっていた。さすが中流域ともなるとなだらかな平地を滑るようにゆったりと軽快な流れである。両サイドには河原がかなりの面積を占め、野球場やサッカーグラウンドといった空間が目立つ。調布の多摩川原橋がおぼろげに見えてくるあたりでようやく工ノ

キンが例によって説明を始めた。「多摩川原橋に平行して巨大な水道管みたいな橋も渡っているだろ？利根川の水が多摩川を渡っているんだぜ」どうやら少しは元の精神状態に戻ったようだ。解説の虫が騒ぎ出し、従来の工ノキン節も回り始めた。「東京に最も多くの水を供給しているのは利根川水系だって言うのは知っているよね。利根川からの分水で有名なのは江戸川だし、荒川にも流れ込んでいるんだ。この水道管橋はね、利根大堰から武蔵水路を通して大量の水が運ばれてくる中で、朝霞浄水場で処理された水を町田や多摩ニュータウンへと導くルートなんだな」こんな時でも工ノキン劇場が始まるといつい聞き入ってしまうのは、全員多摩川への興味が尽きないからなのだろう。新たな知識の吸収は、頭のモヤモヤをも消し去る効果があった。「もし湧水で利根川水系の水が不足すると、東京への水は20%以上送水カットになる。その時に不足分を補うのが多摩川ってわけ！東京にとって最後の生命線なんだぜ、俺たちの川はさ」……イカダは心地よい風を受けてさらに突っ走る。京王相模原線鉄橋、二ヶ領上河原堰、小田急線登戸鉄橋を通過した所で前方に再び大きな堰が見えてきた。「宿河原堰

だ！面倒だけどまだイカダを上げなくちゃ」工ノキンがメンバーに声をかけると全員が頷き、一同進行方向の右岸に上陸した。堤防の上に出ると、午前中に郷土の森で見た多摩川ふれあい教室に類似の施設が建っていた。表示には二ヶ領せせらぎ館とある。「この堰の両脇には魚道も整備されているし、こちら川崎側と対岸の狛江側ともに水辺の茶店と呼ばれる多摩川の体験学習ゾーンにもなっているんだ。多摩川そのものを博物館に見立てて利用することを広く市民に普及させる動きが活発になってきているんだよ」すっかり工ノキンのテンションは復活した模様である。土手を降りてその魚道に沿って岸辺を歩いていると、何やら1艘の手漕ぎボートがこちらに迫ってくる。見る見るうちに着岸したボートからは一人の年輩者が下りてきた。夏の日差しを避けるべく深く被ったキャップの影で表情はよくわからなかったが、その男は

年の割には力のある声で呼びかけてきた。「君たち大きなイカダなんか持って何のグループだい？おじさんはこのせせらぎ館のインストラクターなんだ。多摩川のことを知りたい人たちのお手伝いをしているんだけど、君たちもお客さん？」

工ノキンが掻い摘んで事の概要を説明すると、男は意外にもあっさりと話を信じてこう続けた。「へええ実に興味深い話したねえ、丁度いいや、おじさんもその話に乗った！この先は危険な箇所も少ないが、君

たちで行かすのも川の指導者としては心もとない。これも何かの縁だからいっしょに河口まで下ろうじゃないか。みんなの冒険の顛末も知りたいしね」さすが工ノキンが答える。「そりゃあ心強い！なあ、みんな」タウ工は頷いたが、ハニーは怪訝そうな顔をしている。もう大ザルは現れないのだろうか？源流神から託されたものの今にその尻尾さえも捕まえきれない現実にはたまただ感わされ、結局河口近くまで来てしまったのである。いずれにしても旅の終わりはもう近い。中学生3名を乗せたイカダと初対面男のボートは仲良く二艘並行しながら水を蹴って走った。二子橋を抜け、丸子橋を目前にした時、またまた大きな調布取水堰が迫ったため上陸。あまりの日射に自給川のインストラクターの男は顔を歪めて空を見上げたが、その際にはっきりと表れたその表情をハニーが凝視していることに気付くと慌てたように、「さ、この堰から先は海水も混ざる汽水域になるんだな。もう海が近いぞ…この調布取水堰の魚道には近年アユが遡上して来るって…多摩川も一頃に比べたら結構ましに……」ここでハニーがついに沈黙を破った。「ねえおじさん、前にも会ったことありますよね？」

つつく



二ヶ領せせらぎ館下(宿河原堰)の魚道

※あるむぜお イタリア語で「博物館にて」の意